

教科書を創造的に活用するために



基礎編：私の教材研究[1]

野澤重典 Nozawa Shigenori (長野県更埴市立西中学校)

“A textbook is one of the most important teaching and learning tools.”と言われるように、教科書は、生徒にとって最も学習の拠り所とするところであり、教師にとっても英語を指導する上で大きな影響を与えるものである。私たち英語教師は、その教科書を創造的に活用して、コミュニケーション活動を展開できる教師になりたいものである。筆者らはこれを目指して、互いに実践を学び合う私的な研究会を、若い先生方を中心にして運営している。

本稿では、その会で提案した「教科書を創造的に活用するための教材研究の視点」を紹介する(4回連載)。先生方にとっては余りにも当然という視点もあるかと思われるが、その視点を整理し、頭に入れておくことで、少なくとも創造的にテキストを活用しようという意識にはなれると考えている。

話をより具体的にするために、NEW CROWN, BOOK 3, LESSON 2 の ①, ② (pp. 8-9) を参照し、一緒に考えながらお読みいただきたい。なお、テキストを黙読・音読する、CD を聞く、意味を理解する、などは終了していることにする。

【教材研究の視点】

視点1. New Words の指導で、一緒に教えてしまいたい語・表現を探そう。

各セクションには、必ず新出語がある。私たちは、何らかの段階でそれを指導している。その時、一緒に教えてしまいたい語、例えば、反意語や同義語、関連する語、などがないかどうか見てみよう。この課ですぐ思い浮かぶのは‘several’であろう。おそらく多くの先生方は、「既習の some とほぼ同じ意味だよ」と確認するであろう。その程度でよいのである。できれば、その語彙の使用方法を例文で示したい。“I saw several people in the park.” などの

ように。また、‘foreign’ は ‘foreign country’ や ‘foreign people’ とできるだけ使えそうな形で導入しようと考えられるのもよい。もしそういう関連する語が思い浮かばなければ、「このテキストでは特にないな」と思えばよい。語彙は重要である。豊富な語彙なくしてコミュニケーション活動を展開させようとするのは到底無理がある。

視点2. まとまりで覚えさせたい表現を確認しよう。

次に、語のまとまりとして覚えさせてしまいたい表現がないかチェックしてみよう。例えば、‘two years ago’ は、一語一語別々に覚えるよりは、まとめて覚えてほしい。生徒のノートを見ていると、よく ‘ago’, ‘ago’, ‘ago’ と機械的に練習している生徒がいるが、なるべく ‘two years ago’ とまとまりで練習するように指導したい。他にも “It’s your turn.” ‘for one year’, ‘since December’, ‘the culture of Okinawa’, ‘For example’, ‘for a long time’ などは、いずれも教科書にアンダーラインを引かせるなどして、まとまりとして覚えさせたい。

視点3. 代名詞・指示副詞が指す語は何か確認しておこう。

この課では好例が見当たらないのが残念であるが、LESSON 1 の ② には ‘it’, ‘this’, ‘them’ などが頻出し、何を指しているか押さえないと内容理解もままならないテキストがある。例えば、“Attach them here and here.” (p.2) の ‘them’ は “Attach two paper clips here and here.” なのか “Attach a piece of paper and two clips here and here.” なのかは吟味が必要であろう。定期テストなどで、それを問う出題をする先生方も多いのではないだろうか。これをどう教えるかは別問題である。「この ‘it’

は何を指しているの」と問うことも可能であり、手取り早いですが、できればもう工夫して指導したい。後述するが、「テキストの要約」の段階で何気なく生徒が気付くように指導したい。そのための教材研究である。

視点4 省略されている文は補おう。

このテキストでは、“When did you come to Japan?” や “Have you studied Japanese culture for a long time?” に対する答えの文、すなわち “Two years ago.” や “For about ten years.” がその例である。その答えの文はいずれも省略した形になっているので、それを [I came to Japan] Two years ago. そして [I have studied Japanese culture] For about ten years. と補うのである。これも後ほど述べるが、生徒が要約文を作る上で参考になる。これをやらずに生徒に要約文を書かせると、何も書けないで時間だけを浪費するという結果に陥ってしまうこともある。

視点5 言い換えができる表現を探そう。

② に “The Eisa dance and folk songs were

(①は視点1を表す。)

especially interesting.” という文があるが、これを意味内容を変えずに表現形式を変えるとすれば、例えば、“Mr Clark is interested in the Eisa dance and folk songs. や “It is interesting for Mr Clark to study the Eisa dance and folk songs.” などの表現が可能である。このような表現を見つけ、その転換できる表現を生徒に考えさせるのである。これも後ほど述べる要約文の作成に大変役立つ。教科書の文をそのまま覚えることも大切であるが、教科書の文を別の形式で表現させることは生徒の表現力のレパートリーを広げる上で大変役立つ。

一人で教材研究をしていると気付かないこともあるが、教科会など複数の教師と一緒に探すと、たくさん見つかるものである。教師が気付かなければ生徒に指導のしようがない。「さすが先生」と言われるような教材研究にしたい。

視点6 自己表現（自分自身について表現すること）に使える文を探そう。

例えば、“I have lived in this town for one year.” という表現があるが、この表現形式を用いて自己表現につなげると、“I have lived in Koshoku for 14 years.” などと表現できる。ほかに、先ほど補った [I have studied Japanese culture] For about ten years. の文を用いれば、I have studied English for about three years. と自己表現させることができる。このような文には是非とも注目したい。

また、筆者の勤務する学校では、学校祭の紹介を英語でスピーチする活動を取り入れている。その原稿作りで参考になるであろうモデル文がある。“We invited several people from ...” である。この文を参考にすれば、“We invite students from Inariyama Yogo Gakko to show our class exhibition.” などの表現を指導する機会となる。このように、自己表現につなげることのできると考えられる文をテキストから探し、例文を添えて指導できるようにしたい。

視点7 場面設定の日本語（リード文）は英語で表現させよう。

この課には、「カナダ出身のクラークさんは...」のリード文がある。それを英語にしてみよう。こ

の文は、例えば、“Mr Clark is from Canada. He is studying Japanese culture. He lives in Kumi's town. Kumi is going to have an interview with Mr Clark as a member of the English Newspaper Club.”などと表現することができる。習熟の程度に応じては、“Mr Clark from Canada is studying Japanese culture.”などと表現させることも可能であろう。とても難しくてできないという生徒には、その文に空所を設定したプリント教材を準備するなどしてもよい。やってみるとわかるが、『研究する』って何て言うの?』などと問い、そこで行き詰まってしまう生徒もいる。辞書などで調べて「researchだ」などと表現する生徒もいるが、あまり感心できない。和英辞典を用いるとでたらめな英語になることがあり、その扱いは大変難しいと感じている。できるだけ既習の表現で何とか表現できないものか考えさせる方がよい。既習の表現で英語に転換できるよう日本語を変える力も養いたい。

これは、教師にとってもいい勉強になる。ALTに直してもらうのも良案である。そのためにも、リード文は常に英語にするという意識を持ちたい。

視点⑧ 要約文を作成、あるいは、視点(point of view)を変えて表現してみよう。

最後に、テキストの概要を表現する要約文を作成してみたり、視点を変えて表現してみるとよい。その際、テキストの表現形式をそのまま用いるのもよいが、ここで重要なことは、できれば表現形式を変えてみることである。(視点4・5を活用) 例えば、このテキストでは「クラークさんについて英語でまとめてみよう」という要約のタスクを与えたとする。セクション1を活用すれば、リード文(視点7)を含めて、次のような表現が可能である。“Mr Clark is from Canada. He came to Japan two years ago. He is studying Japanese culture. He lives in Kumi's town. He has lived in her town for one year. He has stayed with the Oka family since December.”

次の時間、それに“ He is studying Japanese folk culture. He is especially interested in the Eisa dance and folk songs. He has studied Japanese

culture for about ten years.”などの情報を加えることができる。

視点を変えて表現するとは、例えば、「クラークさんの立場でテキストの内容を表現してみる」のである。そうすると、次のような表現が可能である。“I was invited to the interview from Kumi. She is a member of the English Newspaper Club in her school. She asked me a lot of questions. For example, she asked, 'When did you come to Japan?' I had a good time with her interview.”などとクラークさんの日記風に表現してみるとよい。

このような8つの視点から教材研究をし、それを授業にどう生かしていくか、これが大変重要である。詳細は次回に譲ることにするが、教科書を創造的に活用し実践的なコミュニケーション活動を展開させるためには、教科書で学習した表現をいかに活用して、その定着を図るかが重要なポイントであると考えている。

ところで、ある1つのセクションを教えるとき、私たちはどのように指導しているだろうか。内容を理解させ、新出語を練習し、音読練習をする。ここまでは多くの教師に共通するところである。しかし問題は、その音読練習の後、どんな活動を行うかである。時間がないので音読で終わっているという先生もいる。教科書の題材内容から離れて、そのセクションのターゲット・センテンスを活用したコミュニケーション活動を行う先生もいる。学校・地域・生徒によってはそれもやむを得ないが、NEW CROWNのよさは題材重視にあると言われる以上、その題材内容を無視してターゲット・センテンス中心の練習を行っていたのでは教科書を創造的に活用したことにはならない。是非とも題材内容を生かした活動を仕組みたい。

そして今回、「要約」と「視点を変えて表現」する活動を仕組みための教材研究の視点を提案してきた。筆者は次の時間に、7名程度の生徒を指名し、そのできた要約文を友だちの前で発表させている。もちろん要約文が書かれたノートや紙は極力見せないようにしている。